

フェアトレードがめざす持続可能な社会

NPO法人フェアトレード・ラベル・ジャパン 事務局長 中島佳織 氏

フェアトレードは、直訳すると公平な貿易。開発途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することにより、立場の弱い開発途上国の生産者や労働者の生活改善と自立をめざす貿易の仕組みであるフェアトレードが、なぜ求められているのか。その背景や仕組みについて、紹介していただきました。



フェアトレードが生まれたきっかけ

いろいろな物を売買・取引する関係、その間の関係はそもそもフェアに成り立っているものだと思いますが、特に、開発途上国といわれる現場では、この関係がフェアでないことが往々として起こっています。

2つほど皆さんにご紹介したい、考えていただきたいことがあります。一つは「現代奴隷」という言葉です。現代奴隷は世界で4,030万人います。もう一つは「児童労働」、これは国際的に定義が定められていて、ざっと言えば、学校に行く権利を奪われて、かつ、非常に危険な労働をさせられていることを指し、その数が世界で1億5,000万人以上いると発表されています。私たちを取り巻くいろいろな品物、農産物、商品などがありますが、そういったものの背景には実はこういった問題が隠されている、そういうところから生まれたのが、フェアトレードです。

世界的な動き

私たちの商品の背景には、「強制労働」「児童労働」が非常に深刻な規模で行われています。私たちが今日着ているもの、食べたものを辿っていくと、その先にいる方々、原材料を作っている方々の現場で起こっている問題は、逆に辿り返してみると、私たちが日頃買ったり、飲んだり、着ているものと直結しているということが最近国内外で盛んに言われるようになりました。

貧困や児童労働などの人権の問題は、国連やユニセフや国レベルでやればいいということではなく、私たちの日常の買い物やビジネスのあり方を見直すことで、こういった問題は解決してくるのではないかというような捉え方が、かなりされるようになってきました。そういう中でフェアトレードという貿易を通して、こういう問題をなくしてい

こうという運動が世界的にも広がっています。

フェアトレード国際基準

フェアトレード・ラベル・ジャパンという組織は、このマークを日本国内で推進する仕事を担っています。これが、フェアトレードの商品であることを示す国際的な共通の認証ラベルです。青と黄緑に注目するとそう見えませんが、黒だけ見ると人が手を挙げている図です。

このマークがつくまでにどのようなルールを守っているのか、どういう商品にこのマークがつくのかですが、一次産業を作っている途上国の生産者から始まって、最終的に私たちの手に届く最終完成品になるまでの全ての商流を定期的に追いかけて、検査、監査をして、フェアトレードのルールを守って貿易している、生産しているのかチェックして、合格になった商品だけはじめてマークがついているという仕組みになっています。日本ではまだまだ認知度が不十分ですが、世界的には、特にヨーロッパではこのラベルは非常に浸透していて、国によっては90%以上の消費者がこのラベルを知っていると答えています。

どういった基準がフェアトレードと呼べるのかということ、仕組みとして広げるためにはルール化しないといけない、細かく基準に落とし込んでいかないといけないわけです。例えば、コーヒーを作るのにどれだけコストがかかっているのか、子どもたちを学校に行かせるためにはどれだけの利益がないとできないのか、病気になったら病院に行くお金も必要です。単に生産するためのコストだけ賄えば人間らしく生きていけるのか、そうではないので、コーヒーを作るためのコスト、肥料を買う、水をやる、そういうコストをプラスして、子どもたちへの教育や食費、医療費などを加味して、一体どれだけ保障すれば持続可能に生きていけるかどうか、全部調査で金額を割り出しています。経済、社会、環境の3つの側面が揃わないと人々が持続可能に暮らしていけないということで基準が作られているのがフェアトレードの国際基準です。



“Trade not Aid”

一つ紹介したい言葉があります。“Trade not Aid”。生産者から発せられた言葉です。生産者からすれば、フェアトレードは支援、援助ではなく貿易なんだということです。実際にフェアトレードのラベルの仕組みが誕生したきっかけの言葉ですが、「自分たちの国にはたくさん先進国から援助がくる。ODAやNGOが支援にきてくれる。それはありがたいんだが、一方で先進国の人たちが自分たちのコーヒーを買い叩いてくる。それであれば結局支援で援助してくれても根本の問題が解決されていない。そもそも自分たち

が飲んでいるコーヒーを買い叩かないで適正な価格で買ってくれば援助なんかいら
ないんだよ。」と、あるコーヒー生産者が言ったそうです。

世界・日本の市場

フェアトレードの認証をとった生産者が自分たちがつくった物全てフェアトレード
価格で買い取られているかというところではなく、先進国側がフェアトレードの価格で
買うことによって言ってくれる人がいない限りは、非常に不利な状況で売らざるを得ないとい
うのが現実です。生産者が頑張ってもフェアトレードに参加しても、私たち消費国家側に
いる企業や消費者がフェアトレードを選ばないとフェアに成り立ちません。

例えば、コーヒーを販売している企業であれば、いいコーヒーをこれから先もきちん
と調達できるというのは、自分たちの事業に直結する訳です。でも、生産者がその日、
食べるものもない、苦勞するような状況でいいコーヒーを作ろうなんてことにはなら
ない訳で、先進国のコーヒー会社にとってみても自分たちに欠かせない原材料を作っ
ている生産者が安定的な生活をしているということは、いいコーヒーを作ってもらうた
めには条件として必須ということで、企業がフェアトレードを持続可能な調達戦略と
して位置づけて本格的に取り組むことが多くなってきています。

このラベルのついた商品の市場規模は世界全体で見ると約1兆円くらいで、世界の
貿易額から見ると小さな市場ですが、年々フェアトレード商品も増えてきました。一方
で、日本の市場規模は113億円です。世界で1兆円とすると1%ちょっとなので、ま
だまだ伸びる余地はあると思っています。

SDGs (エスディージーズ)

国内外のいろんな企業がフェアトレードをやるようになってきた背景の一つに、
国連の持続可能な開発目標、訳してSDGsがあります。これは、2015年に国連
で採択されました。17の目標が定められていて、今まで途上国の問題として語
られることの多かった貧困問題や飢餓問題が先進国側にもあると言われているので、
社会的な課題を世界中の問題としてみんなで取組んでいこうというような目標です。
国連がやればいい、国がやればいいということではなく、私たち国民一人ひとりも
この目標に向かって、ライフスタイルを見直してみようとか、日々の買い物を少し
意識して変えてみようということが求められてきているということが、SDGsが採
択された背景にあります。企業にしてみても、この17のSDGs



目標をビジネスを通して貢献していくということが、今、国内外で盛んに叫ばれています。大手企業を中心に 17 の目標のうち、どれが自分たちの事業で貢献できるのか、重点的に取組んでいくのか、真剣に議論されている状況です。

貧困をゼロにしよう、飢餓をゼロにしようと言われたときに、今日から私たち国民一人ひとりが具体的に何をやったらいいのか、具体的には、フェアトレードのコーヒーやバナナを選んでみようということが、このゴールの達成に近づくと世界的に言われ始めています。国民一人ひとりのレベルに落とすと、一体こんな高い目標に対して何ができるのかと思われがちですが、買い物という毎日やる行為を通してこれに近づけるんだということで、国内外でフェアトレードに注目が集まるようになってきました。学校教育の中でも若い世代を中心に地理や歴史、家庭科、英語など、いろいろな教科書にフェアトレードが取りあげられています。私が知っている限り 10 年くらい前から教育の中で少しずつ取り上げられるようになってきたんじゃないかなと思います。

持続可能な社会をつくるうえで有効

フェアトレードが持続可能な社会をつくるうえで、有効な手段、方法として評価されていることの表れとして、公共調達に近いところにもフェアトレードが取り入れられているということが世界では進んでいます。例えば、ロンドンの地下鉄の職員、パリ空港の職員、フランスの郵便局の職員が着ている制服もフェアトレードのコットンが使用されています。公的な機関でもフェアトレードのものを積極的に取り入れていこうという流れが世界的に広がりを見せはじめています。というのは、やはり税金の使い方というときに単に価格で比較するのではなく、こういうことを大事にした商品しか調達しませんよという、人権や生産者への配慮というのが調達基準の条件の大前提に入っています。市民の意識も価格の問題だけではなく、安さの犠牲になっているものはないんですかという見目を育てていかないと、両方が成り立ってこういうものが実現していかないのではないかなと感じるところです。

もう一つが 2012 年のロンドンオリンピック・パラリンピックです。競技がフェアであるだけでなく、そこで飲み食いされるものもフェアにつくられたものを使おうよということで、調達基準が作られていました。選手たちが頑張ってフェアプレーしても、子どもたちが苦しみながら作っているようなサッカーボールでフェアプレーなんていうのはちょっとおかしいよねということで、調達基準が作られていました。そこで調達されるものはフェアトレードの基準を守って取引されたものだけを使いましょうというルールがありました。2020 年に東京オリンピック・パラリンピックを迎えますが、ロンドンの時を越えるような取組をしないと、日本としては恥ずかしいのではないかなということで、私たちも日々東京大会にもフェアトレードを採用してもらえるように、いろいろな活動をしています。実は、オリンピックの組織委員会で既に調達基準が発表に

なっており、フェアトレードの取引を優先調達すべきだという文言は入りました。でも、本当にロンドンの時のようにちゃんと使われていくためには、国民一人ひとりがこういうものをきちんと求めているんだという社会的な運動にしていけないと、ロンドンの時のようにはならないと思います。

フェアトレードタウン

世界には今 2,000 以上のフェアトレードタウンが存在しています。日本でフェアトレードタウンは 4 都市あります。熊本市、名古屋市、逗子市、浜松市です。フェアトレードタウンになるってどういうことなのか、基準が定められています。それをクリアしなければ勝手には名乗れません。地元の議会がフェアトレードを指示する決議をしている、あとは、市長がフェアトレードを指示する公式表明をしているということも基準のうちの一つです。

認定を得るためには 6 つ基準があり、その市内でフェアトレードが普及しているかどうかはもちろん問われます。人口 1 万人あたり何店舗フェアトレード商品を扱っているのか、小売店だけではなくて、事業所などでもお客様にお出しするコーヒーがフェアトレードになっているとか、いろいろな方法で事業所もフェアトレードを一体となって応援しているということだとか、地域活性化への貢献というのが定められています。途上国の問題だけを訴えるだけではなく、地域の人たちといかに連携して地域の問題を一緒にやって取り組んでいるかということが、フェアトレードタウンに求められています。地域の人たちが人と人が繋がってまちが活性化して、フェアトレードの商品を応援する人が増えれば、それだけその消費も増えるでしょう。市としての取り組みもそうですし、市民の人たちもいろいろな活動の人たちが連携してまちが元気になっていく、そんな取り組みだというふうに理解していただけたらと思っています。

そうはいつても、日本でフェアトレードは十分に普及していない状況です。国民一人あたり一年間にどれくらいフェアトレード商品を買っているかというランキングがありますが、1 位がスイスで 7,750 円、一方で日本は 79 円、コーヒー一杯も買えない状況です。2020 年のオリンピック・パラリンピックまでには、少なくともランキングの真ん中くらいまでには日本がいけるように頑張ってお広めていきたいなと思っています。

私たちにできること

フェアトレードというのは作る人がいるだけではダメで、これを選ぶ人がいてはじめて成り立つ、継続できる運動なので、私たち消費者が一人でも多くこれを知って、毎日難しくても、例えば、10 回に 1 回の買い物にフェアトレードを取り入れるとか、そういう人を増やしていくというのが、どうしても欠かせない運動です。

日本でもコーヒーやチョコレートだけではなく、バナナ、ワイン、アイスクリーム、コットンを使ったタオルなどがあります。贈り物をするときフェアトレードの薔薇を選んでみるとか、フェアトレードのチョコレートをお友達にプレゼントするとか、そんな形で思い出したときにでも選んでいただくというのは、一個一個、一人ひとりのアクションが増えれば、世界を変えていく一歩になるんじゃないかなと思っています。

どんな業界にいてもフェアトレードは取組めます。お客様に出すコーヒー、社員のためのユニフォーム、そういうものもフェアトレードの精神に則って、購入していこうという動きが日本の企業の中にも増え始めています。また、名古屋市では小学校の給食、全生徒 12 万食分にフェアトレードを使ったメニューが取り入れられています。何といってもこういうものを日本の社会でもっともっと増やしていくためにも、まだ残念ながらフェアトレード商品の選択肢が日本では十分にはない状況です。

イオンのお店に行ってフェアトレード商品を探せますが、どれだけの割合がフェアトレードかというのは、残念ながらちょっとの割合です。探さないとなかなか見つからない状況です。それを一つでも増やしていくためには、市民一人ひとりの声企業が届くというのが実はとても大事で、イオンという大きな会社がフェアトレードをはじめたのは、今から 13 年前の 2004 年。きっかけとなったのが、愛知県のある主婦の方が、イオンのお店で社会貢献できる商品売って欲しいと声を届けた、これがきっかけでした。たった一人の主婦の声が社長を動かし、フェアトレードに取り組むようになったとの話を聞いています。一人ひとりの力は小さいかもしれないと思いがちですが、是非オーガニックとかフェアトレードといった商品をより買いやすくするために、一人ひとりがこういうものを求めているんですよと声を届けていただきたいと思います。

